

学習障害児の教育に対する保護者の意識

長田洋一（碧南市立新川小学校）・都築繁幸（愛知教育大学）

I. はじめに

障害児教育に対する保護者の意識を検討したものとして次のものがある。松本ら(1997)は、保護者が養護学校の教育に期待している事項として、①子どもが働くことに関心を持ち、仕事に積極的に参加する、②子どもが周囲の人々とコミュニケーションがとれる、③子どもが集団生活になじめるような能力をつける、という調査結果を示している。松本ら(1998)は、知的障害者の自立を支える家庭科教育の在り方について養護学校免許取得のための認定講習会に参加した教師を対象に調査を行っている。その結果、知的障害児を持つ保護者よりも教師の方が身辺処理により重きを置き、保護者は教師よりもより社会の規則や常識を守れることに関心が向いているとし、教師と保護者との意識のずれを指摘している。都築(2000)は、養護学校高等部に在籍する生徒の保護者が自立観・就労観をどのように考えているかを調査した。それによると①時と場に応じて挨拶や返事ができる、②自分の意見や意思を伝える、③自分のものと他人のものを区別する、④簡単な日常会話ができる、⑤明るく生き生きとした表情で対応ができる等、生徒たちが社会生活を送る上での基本的な生活技術を自立観として考えていることが示されている。

これらの調査は、「保護者のニーズに基づく教育は何か」を考えていくために基礎的な資料を得ようとしているものだが、今、通常学校で大きな問題になっている学習障害児（以下、LD児）に対しても同様に「保護者のニーズに基づく教育」を考えていくために保護者の意識を検討することは必要である。

文部科学省は、LD児等は通常学級内に6%前後に在籍していると報告している。LD児等は1クラスに2人～3人は在籍しており、通常学級の教師は、LD児等の保護者と常に接している。教師には、LD児を持つ保護者がLD児の教育にどのような意識や要望を持っているかを的確に把握して指導にあたることが求められる。

本稿では、LD児を持つ保護者にLD児教育等に関する意識調査を行ったのでその結果を報告する。ただし、今回は、「親の会」に入会している保護者に実施したものであり、「LD児を持つ保護者の意見」ではないことを明記しておきたい。「LD親の会」に入会している保護者は、教育熱心であるからである。また、平成15年3月に「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が文部科学省から公表されたが、本調査は、この報告以前になされたものであることも付け加えておきたい。

II. 調査方法

平成13年4月～5月にA県LD児を持つ親の会の会員を対象に調査を行った。郵送法で行い、58名から回答が寄せられた。子どもの実態は、以下のとおりである。性別では男児が51名、女児が7名であった。在籍状況は、小中の通常学級が48人、小中の特殊学級が5人、中学卒業が5名であった。通級指導を受けた経験のあるものは8名、ない者が50名であった。

III. 結果と考察

今回は、(1)LD児の教育を受ける場、支援体制等に関する5段階評定法に基づく結果、(2)「LD児にとって生きる力とは何か」と「LD児の教育についての要望」に関する自由記述の部分を述べる。

表1 LD児の教育を受ける場および支援体制について

1	補充授業などLD児を支援する態勢が整っていれば通常学級がよい。	4.3(1.0)
2	LD児が通常学級に在籍するならば、専門の教師の指導が必要。	4.8(0.4)
3	LD児の障害や能力に応じた指導をするには、特殊学級がよい。	2.0(0.9)
4	LD児が専門的な指導を受けるためには、は養護学校がよい。	1.4(0.8)
5	学校にLD児が一定人数在籍していれば、LD児だけの学級を作るとよい。	2.3(1.4)
6	通常学級の中で常時LD児の指導に専属で当たる教員を配置するとよい。	4.4(1.0)
7	LD児の通級指導は取り出している間授業が受けられないが、効果がある。	3.5(1.3)
8	週数時間の通級指導は時間がこまぎれで、効果がない。	3.1(1.1)
9	LD児を支援するための通級指導担当教員を現在よりも増員してほしい。	4.4(0.8)
10	LD児の学級担任には事前にその子の情報を十分につかんでおいてほしい。	4.7(0.6)
11	LD児の指導について、積極的に学校と専門機関が連携するとよい。	4.8(0.6)
12	LD児に対して病院から出される薬は有効と思うので服用させたい。	3.2(1.2)
13	LD児が通常学級に在籍している場合、目標は他の健常児と同様に。	2.8(1.4)
14	LD児の学習が遅れても過重負担となるならば特別なことはしてほしくない。	2.8(1.2)
15	学級担任によく知ってもらうため、連絡帳を通して毎日情報交換したい。	3.8(1.1)
16	学校へ定期的に行き、その子の授業の様子などを見ておきたい。	3.8(1.2)
17	学級担任に定期的に訪問をしてもらい、家庭生活の様子を見てもらいたい。	2.8(1.3)
18	LD児は通常学級の中で、他の子たちと全く同様に扱ってほしい。	2.8(1.4)
19	LD児に対して通常学級の中では、常時特別な配慮をしてほしい。	3.3(1.2)
20	クラスの子たちにLD児の理解を深めるためにLDに関する説明をしてほしい。	3.4(1.3)
21	学級担任にはLD児に対して授業の中で学力面での配慮をしてほしい。	4.1(1.0)
22	学級担任にはLD児に対して家庭学習での学力の配慮をしてほしい。	3.7(1.3)
23	学級担任にはLD児に対して生活行動面での配慮をしてほしい。	4.3(1.0)
24	学習課題がLD児にとって難しいと思われた時、課題を切り替えてほしい。	4.2(1.0)
25	LD児が入級することによってクラスの子たちに思いやりの心が育つ。	3.9(1.2)
26	LD児が入級することによってクラスにコミュニケーションマナーが育つ。	3.7(1.2)
27	LD児が入級することによってクラスの子に障害に対する理解が深まる。	3.7(1.2)
28	通常学級でクラスの子とLD児との人間関係がうまくいくか心配である。	4.5(0.8)
29	通常学級においてLD児がクラスの学習活動についていけるか心配である。	4.4(0.9)
30	今後LD児の人格(社会性)について知りたい。	4.6(0.8)
31	今後LD児の就職について知りたい。	4.7(0.7)
32	今後LD児の医学的な面について知りたい。	4.3(1.0)
33	昨年度のクラスで教えられたことも多く、有益だった。	3.5(1.4)
34	昨年度のクラスで得られたこともあり、よかったと思うが苦労も多かった。	4.0(1.2)
35	本人のためにはむしろ他の学級へ行ったほうがよかったのではないかと思います。	2.3(1.4)

保護者は、LD児を支援する態勢が整っておれば通常学級を望んでおり、専門の教師の指導が必要だと考えている。また、常時、LDの指導に専属で当たる教員の配置を望んでいる。学級担任は、事前に子どもの実態を把握して欲しいと願っている。学級担任には、生活行動面での配慮を望んでいる。保護者は通常の学級の中でみんなといっしょに学習させたいと思いつつ、クラスの中の人間関係や学習活動に心配をしている。保護者は、人格面や職業について感心が高く、卒業後の進路への不安があることが推察される。担任に家庭訪問の実施を望むよりも保護者が定期的に学校に向向き、授業の様子を見たり、連絡帳を通して毎日、情報交換をしたい、としている。

(2)「LD児にとって生きる力とは何か」についての自由記述

「LD児にとって生きる力とは何か」を記入してもらった。記述された内容のキーワードを分析すると、人との関わりに関する記述と個人に関する記述とに大別される。それををまとめてみ

ると次の表のようになる。

表2 「LD児にとって生きる力とは何か」についての意見

人との関わりに関するもの	人数	個人のもの	人数
・社会性	10	・長所の伸長	8
・人からの援助	6	・自己受容(自分を認めるなど)	7
・対人関係	5	・日常生活に必要な能力(身辺処理)	7
・コミュニケーション	5	・自信をつける	5
・交流	1	・働く(職業を持つ、お金を稼ぐ)	4
・友人	1	・自己決定能力を身につける。	2
・自他の尊重	1	・状況判断ができる	1
		・苦手なことを克服する。	1
合 計	29	合 計	35

LD児においては、社会性、長所の伸長、自己受容が多いのが特徴と言える。「良い面」を伸ばして欲しいと保護者は願っている。

以下には、記された例を挙げる。

表3 「LD児にとって生きる力とは何か」に関する記述例

・自分の良い点を見つけさせ、自信を持たせること。自分でできなくても周囲に助けってもらえる(援助)よう対人関係を円滑にする。結局は社会性を育てること。
・人とのコミュニケーション、自分の苦手なことを助けってもらえる(援助)ように、それを伝えることができるように。深刻にならず、「僕は〇〇〇が苦手だから教えて!」と言えるように。本人が自分自身を受け入れる(自己受容)こと。
・社会の中で、自分一人でも考えて決断したり、問題を処理したりすることのできる力、強さを身につけることだと思う。「不可能はない、やれば必ずできるんだ。」という自信を身につけさせたい。その自信が、壁を一人で乗り越えていく力になると思う。
・成長しない子どもたちではなく、必ず成長する子どもたちだ。できないことを底上げするよりも、できることを伸ばす(長所の伸長)方が全体的に成長するように思う。
・自分が周りの子たちと違っていると気づきつつも、自分を受け入れてくれる子たちや先生方、大人たちと交流していく中で自分を価値のある人間だと認めていけること(自己受容)。
・日常生活を一人で送ることができる最低限の生活能力、悩みを話し合える数人の友人、自分が周りとは少し違うことを理解し、それでもよしと思える気持ち(自己受容)
・周りの状況判断ができるようになること。(今、自分が何をやる時かを考えて行動できるようになること)
・勉強や人間関係でうまくいかない時は、「一生懸命やってもできなかったのなら、それは方法が悪かったからだ。違う方法を考えてごらん。」と話している。すると本人は「自分に能力がなかったわけではない。方法が間違っていたのだ。違う方法でやればよいのだ」と元気が出るようだ(苦手克服)。
・自分の意志を持って生きていってほしい(自己決定能力)。
・不利な条件の人生の中で自分を尊び他人を尊ぶ心を育むこと(自他の尊重)。

(3) LD児の教育についての要望

「LD児の教育に何を望むか、期待するもの」を記述してもらった。その内容のキーワードを整理すると教師の資質や指導に関する記述と教育制度(システム)に関する記述とに大別される。それをまとめてみると次の表のようになる。

表4 LD 児の教育についての要望

教師の資質や指導に関する記述	人数	教育システムに関する記述	人数
・ LD について勉強してほしい	12	・ 幅広い体制(相談、訓練の場)作り	12
・ 特殊教育担当教員の質の向上	2	・ 指導者の増員(T,T、スクールカウンセラーなど)	9
・ 道徳教育の推進	2	・ 個別の少人数教育	4
・ 授業後の補習	2	・ 通級の充実	3
・ 個への働きかけ	2	・ 早期発見、早期教育	3
・ LD 児を守ってほしい	1	・ 報道の充実	2
・ 教師同士の連携	1	・ 養護学校や特殊学級での受け入れ	2
		・ LD のためのクラスの新設	2
		・ 学校開放	1
合 計	22	合 計	38

表4に示されるように教師の「障害の理解」と指導者の増員を含めて「体制づくり」に関心が寄せられている。

以下、記された例を挙げる。

表5 LD 児の教育についての要望の記述例

<p>・ もっと現場の教師に LD についての十分な知識を持ってもらいたい(LD について勉強してほしい)。リーフレット等を持っていき、本人の特性を説明してもしつけの問題で片付けられてしまう。義務教育下では席が用意されているものの、高等学校では進路が限られており、先が不安である(幅広い体制作り)。</p>
<p>・ 「鉄は熱いうちに打て」のように、少しでも早い年齢で援助(早期発見、早期教育)があればありがたい。また、教師の体制をもっと幅広く作ってほしい。</p>
<p>・ LD 児だけでなく、人間を大切にする教育や人と人との間で育つ人である基本(道徳教育の推進)を忘れない教育を先生にしてほしい。教師の増員と少人数教育を望む。個人に合った教育(個への働きかけ)ができる教師の養成、つまり特殊の教師は普通学級の教師よりレベルの高い教師を望む。</p>
<p>・ 本人の強い希望で今春から障害児学級に通っている。現在、少人数のクラスで居場所を得て、毎日通っています。LD 児のための通級を学校に希望した(通級の充実)ののだが聞き入れられず、障害児学級にしか入れてもらえなかった。LD 児のためのクラスがあればと思う。ADHD も強く、併発しているので、中学校でも普通クラスはとても難しいと思う。「LD 特殊学級」の実現を願っている。</p>
<p>・ 園児から小 1,2 年の間は他の子も落ち着かなかったり、また園や学校に担任以外の大人がいることを不思議がらない。だからいつでも授業参観ができるなど LD 児に親が手助けしたり、また様子をよく見るチャンスを親にももらえるとよいと思う(学校開放)。特にこの時期は複数担任を要望したい(指導者の増員)。中学に入学してからは本人のプライドも高くなるので、LD 児の指導のみでなく生活の全体の流れをサポートしてくれるスクールカウンセラーなどの先生がいるとよいと思う(指導者の増員)。あくまでも自然の形でのサポートが必要と思う。</p>
<p>・ LD 児が学校教育の中で居場所がない。通常の学級か特殊学級か、どちらもしっかりこず、浮いているような気がする。せっかく通級していても、先生同士の連携がなく、学級担任は通級の先生との情報交換をしようとしめない。もっと先生同士の情報交換(教師間の連携)や愛教大 LD 研究会のような勉強会への参加(LD について勉強してほしい)を望む。</p>
<p>・ 本当に色々なタイプに分けられるので、その子によって随分違ってくると思うが、通常の学級で少人数で T、T の先生に入ってもらい、ポイントポイントで声かけしても</p> <p>らう(個への働きかけ)だけでも随分違うと思う。授業に集中できないので、授業後に学業不振の子といっしょに補習してもらえるとすごくうれしい。でもその前に先生</p>

方に LD のことについて本当に理解してほしい (LD について勉強してほしい)。理解してもらわないと、子どもに対する対応が全然違うと思う。先生方も非常に忙しそうなので、LD について勉強することは大変かと思うが、これほど LD の子が沢山いる以上は先生方も理解できた方が学級経営にもよいと思う。

- ・先生の質の問題として、様々な子どもを受け入れられる大きな器がほしい(教員の質の向上)。制度としては、今の養護学校が LD も教育できるような場であるとよいと思う(養護学校での受け入れ)。通常の学級に行っていたが、それが必ずしもよかったとは思っていない。本人の負担が大きかったと思われるからだ。中学を卒業した時、「やっと終わった！」と親の気持ちが楽になった。
- ・ LD 児とその周辺児は教育システムさえ整えば(幅広い体制作り)、通常学級で友人関係を増やしていけると思う。そのためには、複数担任(指導者の増員)やきめ細やかな通級指導(通級の充実)などが欠かせない。また学校でつまずいてしまう子どもでも学童保育がよりどころとなる場合も多々あるように思われるので、学童保育の充実が求められる(幅広い体制作り)と思う。通常の学級で困難な子どもの場合にも、各学区に障害児学級があれば(特殊学級での受け入れ)、義務教育終了まで地域で過ごすことができると思う。
- ・現場の先生の認識 (LD について勉強してほしい) と学校全体のサポート体制(幅広い体制作り)がないと、いろんな問題に対応できないと思う。私の息子のクラスには、ADHD・ADD・LD 児と思われる児童が 4~5 人いるが、親が子どもの状態に気づかなかつたり、学校に言うことにより子どもを差別されることを嫌ってあえて言わない方がいて、担任にとってたいへんなクラスである。もっと新聞やニュース番組で情報を流してほしい(報道の充実)と思う。
- ・劣っていることで人にバカにされたり、傷つけられたりする場面でしっかりと守ってほしい。足りない所を補い合う社会を LD を通して作ってほしい。何のために教育はあるのか、純粋に先生方も考える時期にきていると社会の様々な事件を通して感じる。

LD 児を持つ保護者の教育に対する要望の一例を示したが、現在の教育制度や教師の指導が保護者を満足させているものではないことは確かである。

IV おわりに

保護者の LD 児の教育に対する要望では、教師に関するものと教育制度に関するものとの 2 つに分けられるが、教育制度に関する要望、例えば、指導者を増やしてほしいなど、は予算を伴うものであり、教育行政側の理解と支援に依存せざるを得ないのが現実である。

教師の関することに触れてみたい。ある保護者は、以下のように記している。

担任の先生の対応で、ずいぶん違ってくると思う。ほんのちょっとした援助や理解で、学力はだめでも、人間として、クラスメートと同じ行動ができることを知ってほしい。今の担任の先生は、私の子のテストやプリントには振り仮名を全てつけてくれたり、本人が希望しなければ宿題はなし。もちろん他のクラスメートには理解させるよう、話をしてくれた。先生はいつも言ってくれる。「彼のペースで、ゆっくりでいい。彼にとって学校が楽しいところであればいい。そのための援助なら何でもする。」と。このような先生が通常の学級にたくさんいたらと思う。またそれをバックアップできる学校トップの考え方も必要だと思う。

これに示されるように LD 児に対する指導は、担任教師のわずかな心遣いや配慮が何よりも必要である。LD 児に対する指導も他の健常児に対する指導と基本的に変わりはないが、他の健常児よりも LD 児には「丁寧に指導する」必要がある。LD 児に担任教師が丁寧に指導する心構えがあれば、LD 児を特別扱いしなくてもクラスの中の一員として適応した生活が送れる。保護者は集団生活に適応していけることを強く願っている一方で、その補充として個別指導を望んでいる。そのためには、今後、ティームティーチングの担当教師や通級指導担当教師だけではなく、

全ての教職員の協力を得て学校全体で支援体制を作っていく必要があると思われる。

引用文献

- 1) 松本携子・都築繁幸・林隆子 (1997) 知的障害者の自立を支える家庭科教育の在り方をめぐって 信州大学教育学部紀要、第 92 号、p13～p23.
- 2) 松本携子・都築繁幸・林隆子 (1998) 知的障害者の自立を支える家庭科教育の在り方をめぐって(2) 信州大学教育学部紀要、第 95 号、p13～p23.
- 3) 都築繁幸 (2000) 知的障害者の自立をめざす支援の在り方をめぐって(2) 愛知教育大学障害児治療教育センター治療教育学研究、第 20 輯、p65～p72.